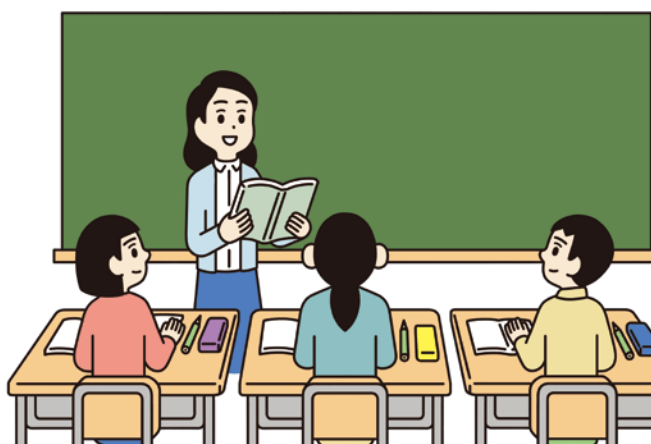


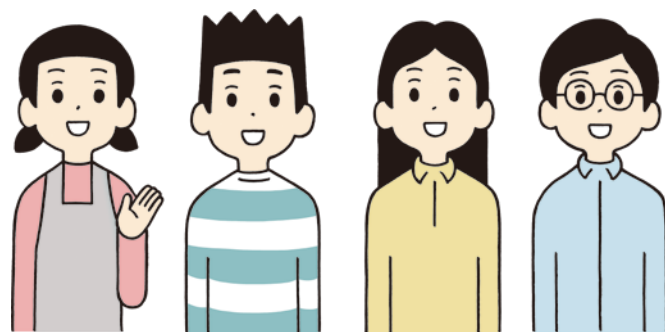
教材研究

ここから始める



教材研究をして、教室に合った授業を作ろう

どうして、 教材研究を するのか。



戦後を代表する国語教育学者・児童文学作家であり、編集委員として光村図書の「国語」を作られた石森延男先生が、「教科書に対する愛情」（昭和四十一年）という言葉が寄せられています。

その一部を引用します。

どんなに苦心して作った教科書でも、これで、もう、いいというものはない。

作ったものが満足しないのだから、ほかの人には、なお不満にちがいない。

あそこをこうしたら、ここをこうしたらと、つづけばつづくほど、傷がでてくる。

けれども、

ただつくだけでなく、ただだけでなく、足りないところを補ってくれないか。

新しい、鋭い、ゆたかな目で補ってくれないか。

そうすれば、いくらか育つだろうと思う。

たとえ傷があったとしても、

その傷を、いい手がかりとして、

これを使う子どもたちの目を開いてほしい。

子どもたちの学ぼうとする意欲をかりたててやってほしい。

石森先生は、この文章を「ほんとうに教科書を働かせる原動力は、あなたのこの教科書に対する愛情である。」という言葉で締めくくっています。

私たちは今できる最大の力で教科書を作っていますが、先生方が多様な子ども一人一人に向き合えば、不十分に感じる点もあるでしょう。しかも、不十分な点は、クラスや子どもによって違います。そこに、教材研究をする理由があります。教材と出会った子どもたちが生き生きと学べるように、何を補い、どのような手立てを講じたらいいかを考える。それが教材研究であり、石森先生の言葉にある「愛情」の一つなのです。

しかし、「教材研究って、どうするの。」と思う方もいるでしょう。ご安心ください。簡単かつ短い時間でできる教材研究の方法を、次ページ以降でご紹介します。





「読むこと」の教材研究

「読むこと」の基本的な教材研究の方法をまとめました。
令和六年度版小学校国語教科書には、教材研究をするための
観点が載っています。

1 つけたい力を確かめる

まず、単元名を確認しましょう。単元名は、指導事項と言語活動を
組み合わせたものです。ただ、単元名は抽象度が高いので、これ
だけでは分かりにくい場合があります。例えば、上の例（こまを
楽しむ）では、「まどまりをとらえて読み」とありますが、これは
どういうことでしょうか。

そこで、次に、「学習」ページの「目標」の下段を確認します。

ここには、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」に対
応する形で、具体的に書いてあります。どんな力を身につけるのか
が、先生にとっても、子どもにとっても分かりやすくなっています。

知識及び技能

- 文章全体と、その中心となるぶぶん
- とのかんけいをとらえる。
- 文章全体と、その中心となるぶぶん
- とのかんけいをとらえる。
- 文章全体と、その中心となるぶぶん
- とのかんけいをとらえる。

思考力、判断力、
表現力等

2 既習事項を確かめる

身につけるべき力が分かったら、既習事項を押さえます。扉の
「これまでの学習」をチェックしましょう。

3 教材文を読む

つきたい力と既習事項を確かめたら、いよいよ
教材文を読みます。そのとき、①と②で確かめたこ
とを念頭に、気づいたことを書き込んでいきます。
それでも、最初は、何に着目すればよいかわからないこともあ
るでしょう。そんなときは、「学習」ページの「言葉に着目しよ
う」を見てみましょう。ここで取り上げている言葉を探したり、
その言葉を基に文章構成を考えたりすることは、教材研究の第一
歩になります。

教材文の構成や
設定も、ここで
確かめる。

4 子どもの問いを予想する

「問いをもとう」の呼びかけに対して、子どもがどのように答え
るか、そこからどんな問いをもつかを考えてみましょう。問いを予
想したら、その問いと学習の目標をどのように結び付けるかを考え
ましょう。

5 課題に取り組む

最後に、先生自身が、「学習」ページの課題に取り組んでみま
しょう。そうすることで、「○○さんは、ここでつまづきそうだ
な。」「この課題では、二つに意見が割れそうだな。」などの気づき
が生まれ、授業のイメージにつながっていきます。



単元名

まどまりをとらえて読み、
かんそうを話そう

既習事項

二年生学んだと
わづめいする意

10のう



こまを楽しむ

文様

全体と中心

あなたは、「文様」を知っていますか。
こま遊びをしたことはありませんか。二つ
の文章から、新しい発見はあるでしょうか。

こまを楽しむ

安藤 正樹

①こまを回して遊ぶことは、昔から世界
中で行われてきました。長い間、広く親
しまれるうちに、こまには、さまざま
くふうがつまかざねられてきました。そ
うして、たくさんこまが生み出されて
きました。日本は、世界でいちばんこま
のしゅるいが多い国だといわれています。
では、どんなこまがあるのでしょうか。

問い文

問い文が読めれば、
読みやすくなる。



た、どんな楽しみ方ができるのでしょうか。

②色がわりこまは、回っているときの色
を楽しむこまです。こまの表面には、も
ようがえがかれてあります。ひねって回す
と、もように使われている色がまざり合
い、元の色とちがう色にかわるのがどく
ちようです。同じこまでも、回す速さに
よって、見える色が変わってきます。



色かわりこま
速く回したとき ゆっくり回したとき

③鳴りこまは、回っているときの音を
楽しむこまです。こまのどしは大きく、
中がくうどうになっていて、どうの横に
は、細長いあなが空いています。ひもを



鳴りこま
どう
鳴る音のなか

気づいたことを書き込む。

見通しをもとう

もくひよう

問いをもとう

あなたがはじめて知ったこまや、気になったこまは、どれ
ですか。そのこまについて、どのようなことが書かれていま
したか。

段落ごとに、こまのせつめいをていねいに読
み、遊んでみたいこまについて話そう。

文章全体と、その中心となるぶぶん
とのかんけいをとらえる。
段落ごとに、こまのせつめいをていねいに読
み、遊んでみたいこまについて話そう。

5

とらえよう

この文章には、「問い」が二つ書かれています。
「問い①」「問い②」に分けて、ノートに書きましょう。
「問い①」は、文章全体を、「はじめ」「中」「
おわり」に分けましょう。①「全体と中心」②「中」
「中」では、「問い」にたいする「答え」が書かれ
ています。それぞれの段落に書かれていることをた
しかめ、「答え」をせりりしましょう。

3

言葉に着目しよう

文章全体の組み立てを考えると、次のこ
とまがかりにしよう。
「問い」は、文のさじが「一」でしようか。
「中」は、文のさじが「二」でしようか。
「おわり」は、文のさじが「三」でしようか。
「中」は、文のさじが「二」でしようか。
「おわり」は、文のさじが「三」でしようか。
「中」は、文のさじが「二」でしようか。
「おわり」は、文のさじが「三」でしようか。

この観点で分析する。

「白いぼうし」の教材研究

1 つけたたい力を確かめる

まずは、教科書で想定されている指導事項の確認です。「単元名」を見てください。「ふしぎな出来事をとらえて読み、考えたことを話そう」とあります。「ふしぎな出来事をとらえて読み」とは、どのような力をつけるためのことなのでしょう。そのヒントは「学習」ページの「目標」下段にあります。ここに示されていることがどのような指導事項と結び付いているのかも確かめましょう。一つ目の「登場人物の思っていることが分かる言葉を見つける。」は、「様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使い、語彙を豊かにすることが出来る。」(知・技(1オ)を子どもに理解しやすい言葉で表現していることが分かります。二つ目の「登場人物の会話や行動をたしかめ、思っていることとその理由を考える。」は、「登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることができる。」(思・判・表C(1イ)を表しています。このように、つけたたい力を把握することが教材分析の第一歩になります。

「登場人物」のような
学習用語の意味は、改めて
押さえるようにしましょう。



2 既習事項を確かめる

つけたたい力を確かめたら、「これまでの学習」を参考にして、既習事項を振り返り、確かめます。「白いぼうし」では、学年の最初の「読むこと」単元のため、「三年生で学んだこと」で振り返ります。既習事項を子どもが思い出すことで、学びがつながっていきます。



起った出来事と、そのとき登場人物が思っていることをたしかめ、ふしぎだと思ったことについて、考えをつたえ合おう。

・登場人物の思っていることが分かる言葉を見つける。
・登場人物の会話や行動をたしかめ、思っていることと理由を考える。



単元名
ふしぎな出来事をとらえて読み
考えたことを話そう

既習事項
三年生で学んだこと
物語・話



白いぼうし

タクシー運転手の「松井さん」のまわりでは、ときどき、ふしぎな出来事が起こります。「白いぼうし」では、いったいどんなことが起こるのでしょうか。

3 教材文を読む

いよいよ教材文を読みます。まずは、一人の読者になって読みます。その次は、「学習」ページの「言葉に着目しよう」を参考にして読んでみましょう。「白いぼうし」では、登場人物の会話や行動を確かめるための三つの観点が書かれています。この三つの観点に気をつけながら教材文を読んでみます。気になったところには線を引くとよいでしょう。「言葉に着目しよう」は、子どもたちが「言葉による見方・考え方」を意識的に働かせることができるよう設置していますが、先生の教材分析を助けるものにもなっています。

子どもの気持ちになって音読してみたり、同時に新出漢字の確認をしたりするのもよいでしょう。音読をすると、子どもがつまずきそうな場所が浮かび上がってきて、全文を読むのにかかる時間を把握することにもつながります。もちろん、授業内の範読の練習にもなります。

1 言葉に着目しよう

- 会話や行動と、その様子を表す言葉
「せかせかと書いてました」(28ページ2行目) など
- 色やにおいを表す言葉
「すっぱい、いいにおい」(26ページ3行目) など
- くり返し出てくる物を表す言葉
「かわいい白いぼうし」(24ページ5行目) など



色を表す言葉は赤色の線、
においを表す言葉は青色の
線にしてー。



白いぼうし

あまのきみこ
柿崎サラ 作

①「これは、レモンのにおいですか。」

ほりはたて乗せたお客のしんしが、話しかけました。

「いいえ、夏みかんですよ。」

信号が赤なので、ブレーキをかけてから、運転手の松井さんは、

ここにきて答えました。

今日は、六月のはじめ。

夏がいきなり始まったような暑い日です。松井さんもお客も、白

いワイシャツのそでを、うてまでたくし上げていました。

「ほう、夏みかんでは、こんなににおうものですか。」

「もぎたてなんです。きのう、いなかのおふくろが、速達で送って

くれました。」

「ほう、ほう。」

「あまりうれしかったので、いちばん

大きいのを、この車にのせてきたの

ですよ。」

信号が青になると、たくさんのお客が

いっせいに走りだしました。その大

通りを曲がって、細いうら通りに入っ

た所で、しんしはおどいてきました。



3 教材文を読む

教材文を読んで気づいたことなどは、直接書き込んだり、ノートにまとめたりするといよいでしょう。教科書や、教材文をコピーしたものに直接書き込む方法は、本文の一語一語に立ち止まり、その語や文を分析できるというよさがあります。いっぽう、ノートを作成すると、文章全体を俯瞰してみないと分からないことが分かるというよさがあります。例えば、一つの行動から人物像が分かることもありですが、その点をつないで線として俯瞰して見たとき、人物像が見えることもあります。どちらでも、そのときに合った方法や自分に合った方法を選ぶといよいでしょう。

4 子どもの問いを予想する

ここからは、子どもの視点で読むことがポイントになります。「問いをもとう」には、作品や文章を一読した後の子どもの心を揺さぶる呼びかけを示しています。呼びかけについて考えることを通して、この単元で考えたい自分自身の「問い」をもちます。それを、この単元で身につけたい力に関わる「目標」へとつなげることで、子どもたちの学習に取り組む意欲が高まるようになっていきます。

この単元の「問いをもとう」では、「ふしぎだな。」「どうしてだろう。」「と思ったことを出します。教材研究では、授業する教室を思い浮かべ、子どもたちがどのような問いをもちそうかを考えましょう。子どもたちがもちそうな問いは多様ですが、すぐに解決できそうな問いと、じっくり考えたい問いとに分けることができます。そのように整理し、みんなで考えたい問いは何かを考えてみると、授業全体のイメージが見えてきます。それが、その教室に合った教材研究につながります。

5 課題に取り組む

授業をする前に、「学習」ページの課題に取り組んでみます。子どもがどこでどんな反応をするのかも、いっしょに考えてみましょう。

「学習」ページの課題に実際に取り組んでみると、指導展開や気をつけるとよい点が自然に浮かび、授業のイメージがもてるようになります。新しい知識や技能について、子どもたちの生活体験と比較して分かりにくいところはないかなど、学習活動を体験することで、より理解は深まります。例えば、「ふかめよう」の『松井さん』は、どのような人物だと思えますか。』では、子どもが立ち止まりそうな叙述に線を引いてみます。教科書26ページ5〜6行目の「松井さんは、く石でつばをおさえました。」から、「松井さん」が「やさしい人」と思う子どももいれば、「きつちりした人」と思う子どももいるでしょう。子どもがどんなところに着目して、どのように考えるかを想像することが重要です。子どもの立場で取り組んでいたものが、教材分析や指導展開例となり、少しずつ授業ができあがっていくことに気づくでしょう。

どんな力を身につけるかを意識し、子どもの姿を思い浮かべながら反応を予想することで、気づかせたい言葉を厳選し、支援を工夫して授業に臨みましょう。



問いをもとう

この物語を読んで、あなたが「ふしぎだな。」「どうしてだろう。」「思ったたり、みんなと考えてみたいと思ったたりしたのは、どのようなことでしょうか。

どうして「女の子」は消えてしまったのだろう。

「女の子」が急いでいた理由はなんだろう。

「松井さん」に聞こえた「よかったね。」「よかったよ。」の聲は、他の人には聞こえたのかな。



説明文

順序や部分

「まず」「つぎ」などのことばに気をつけたよ。

「先」「まん中」「はし」などのことばがないと、作るときにこまるね。



二年下「紙コップ花火の作り方」

対比

次のような言葉に着目すると、説明していることとの関係がはつきり分かります。

- ・「」がよく分かります。しかし、——」（58ページ7行目）
- ・「」がよく分かります。でも、——」（59ページ9行目）

四年上「アップとルーズで伝える」

事実（事例）と意見

文の初めや終わりの言葉に気をつけると、事例と意見の関係に気づきやすくなる。

- ・「例えば」（201ページ4行目）
- ・「のである」（201ページ2行目）
- ・「が大切なのである」（201ページ14行目）

五年「想像力のスイッチを入れよう」

定義

文章の中で使われる特別な言葉の意味は、次のような言い方で、最初に示されることが多い。

- ・私はこれを、——とよんでいます。
- ・——とは、——のことです。

六年「時計の時間と心の時間」

文学

物語の設定（いつ、どこ など）

「あさ」や、「はるかぜ」という、じかんや 季節のことばがあると、「いつ」がわかるね。

「どこ」は、「上を 見上げます」のように、とうじょうじんぶつがした ことでも わかるね。



二年上「ふきのとう」

描写

- 気持ちをそのままあらわす言葉
「びっくりして」（26ページ12行目） など
- したことや言ったことをあらわす言葉
「ためいきをつきます」（23ページ7行目） など
- 場面の様子をあらわす言葉
「さわやかな花のかおり」（29ページ3行目） など

三年上「春風をたどって」

情景

- 情景や、場面の様子がよく分かる表現
・「空はからっと晴れていて、もずの音がキンキン ひびいていました。」（15ページ5行目）
- ・「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」（30ページ13行目） など

四年下「こんぎつね」

独特な表現

作者の独特な表現に着目すると、場面の様子が豊かに想像できる。また、二つの場面を対比するときは、それぞれの場面から特徴的な表現を見つけ、その印象を比べるとよい。

- 言葉のひびきで様子を表す表現
・「グラムボンは かぶかぶ笑ったよ。」（112ページ6行目）
- ・「まもなく、水はサラサラ鳴り、」（122ページ1行目） など
- 色やたとえの表現
・「日光の黄金は、夢のように水の中に降ってきました。」（114ページ10行目）
- ・「ラムネのびんの月光がいつぱいにすぎ通り、」（119ページ4行目） など

六年「やまなし」



「話すこと・聞くこと」 「書くこと」の教材研究

1

単元名
話す・聞く
大事なことを落とさずに聞こう

2

既習事項
たしかめよう
「三年生・学んだこと」……
「見通しをもとう」

3

聞き取りメモのくふう
学校の先生たちは、小学生のころ、何にむかっているのだったでしょう。一場面たちは、分担任して話を聞き、友達と知らせ合うことにしました。

4

問いをもとう
人の話を聞いて、メモを取ってあげようかと思ったことはありますか。話を聞きながら取るメモでは、どんなくふうをしようか。

5

1
メモを取る話題と目的をたしかめよう。
先生が小学生のころに、むかうようになっていたこと。聞いた話を、友達に知らせる。

2
メモの取り方について考えよう。
中川先生の話を聞きながら、要点をメモしよう。友達に知らせる。としたら、どんなメモを取りますか。

3
くふうしてメモを取り、メモを使って発表しよう。
中川先生
①水泳
しょうろ 3
おおよぎ 5
タイム 5
②絵
えのぐ(おぼあちゃん)
夏休み けや?

4
メモを取るくふうについて話し合おう。
発表するとき、メモの内容は十分でしたか。グループで、メモを見せ合いながら、活用できたところや、次にメモを取るくふうをくふうしたいことを話し合いました。

5
メモを取るくふうについて話し合おう。
発表するとき、メモの内容は十分でしたか。グループで、メモを見せ合いながら、活用できたところや、次にメモを取るくふうをくふうしたいことを話し合いました。

重点箇所は、地色やマークで強調しています。

令和六年度版小学校国語教科書では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材研究も、「読むこと」と同じようなステップで行うことができます。

1 つけたたい力を確かめる

まず、単元名を確認しましょう。ただ、「読むこと」と同じく、単元名は抽象度が高いので、これだけでは分かりにくい場合があります。

そこで、次に、「目標」の下段を確認します。「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」に対応する形で、具体的に書いてあります。冒頭ページの「見通しをもとう」で、重点箇所もいっしょに確認しましょう。

必要な言葉の書きとめ方を知る。
目的に合わせて、大事なことを書きとめながら聞く。
知識及び技能
思考力、判断力、表現力等

2 既習事項を確かめる

身につけるべき力が分かったら、既習事項を押さえます。冒頭ページの「確かめよう」をチェックしましょう。

3 話題や題材を吟味する

つきたい力と既習事項を確かめたら、教科書で設定されている話題や題材を確かめます。他教科の学習や行事と関連させられることはないか、自分の学校やクラスの子どもの自分の興味・関心や生活と結び付けて取り組めるものかどうかを検討していきます。

例えば、四年上「聞き取りメモのくふう」では、学校の先生たちに、小学生の頃に夢中になっていたことをインタビューする活動が設定されていますが、もし、社会科見学や職場体験が予定されているのであれば、インタビュの相手を、そこでお世話になる方にしてもよいでしょう。

4 子どもの問いを予想する

「問いをもとう」の呼びかけに対して、子どもがどのように答えるか、そこからどんな問いをもつかを考えてみましょう。動画がある教材もあります。その場合には、動画を見ておき、先生自身も問いを立ててみましょう。

5 活動に取り組む

最後に、先生自身が、実際の活動に取り組んでみましょう。そうすることで、「○○さんには、□□の手立てが必要そうだな」「△△という表現をここで提示しよう。」などの気づきが生まれ、授業のイメージにつながっていきます。

「話す・聞く」「書く」では、ここが重要！

目ざせ！ 教材研究の達人

ここでは、さらに深く教材研究をするための方法をご紹介します。教材研究に慣れてきたら、取り入れてみましょう。

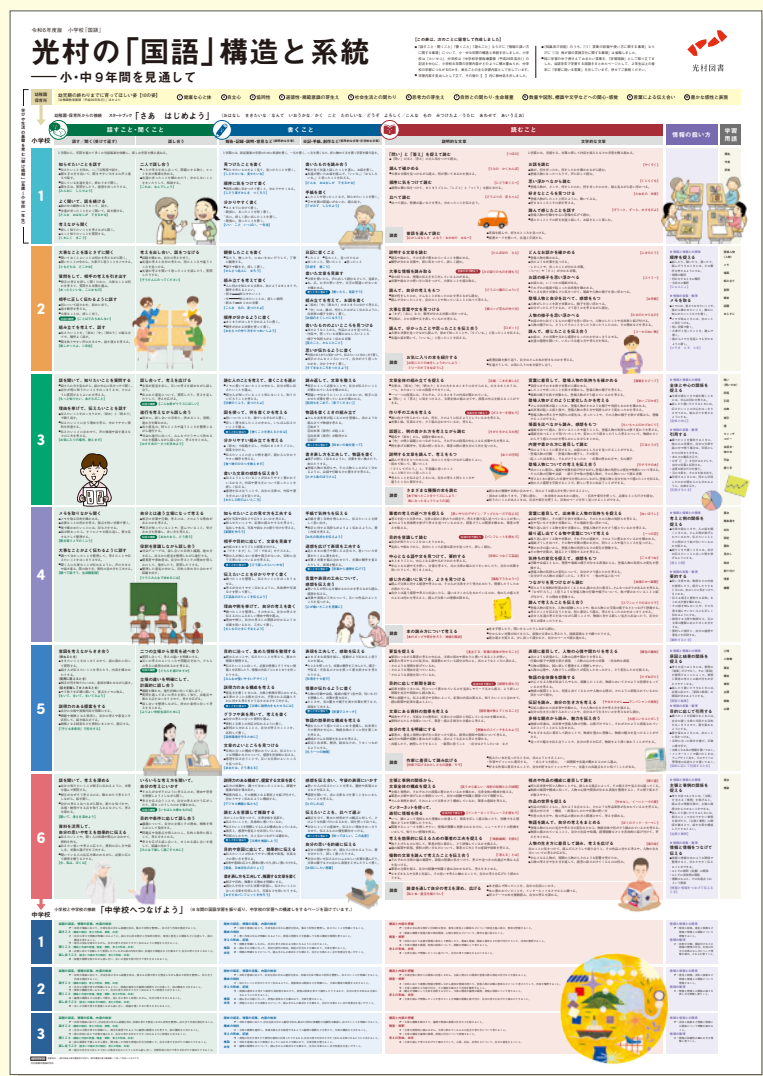
① 六年間の系統を意識して研究する

教材研究において、どんな力をつけたいのかは必ず意識することですが、そのときに、六年間の系統にも目を向けてみましょう。

「ここまで何を学び、どんな力をつけてきているのか」や「この後の学年で、この力はどんな力へと発展するのか」が分かると、子どもに適切な助言やサポートができるようになります。

光村図書では、無理なく国語の力をつけていけるように、教材の配列を工夫しています。「光村の『国語』構造と系統」などを参考に、学年を超えた教材どうしのつながりを意識して、研究するとよいでしょう。

「光村の『国語』構造と系統」のPDFはこちらから



② 言語活動を考える

子どもの実態に合わせて、教科書の言語活動とは異なるものを考えてもよいでしょう。ただし、言語活動は、楽しければよいわけではありません。身につけるべき力を意識することが大切です。

① A先生の提案

六年「帰り道」

「言語活動」人物紹介文を書く

この教材の学習では、視点や作品の構成に着目して、登場人物の人物像を多面的に捉える力をつけていきます。多面的に捉えるとは、「律」と「周也」それぞれが思う自分自身だけでなく、それぞれから見た相手、さらには、読者から見た二人を基に、人物像を思い描くということです。そう考えると、朗読劇など、いずれかの登場人物に共感しながら読むような言語活動よりも、第三者の目線で語る活動のほうが適切です。人物像や性格を表す語彙を増やすことも視野に入れて、人物紹介文を書く活動を設定しました。



③ 副教材を探す

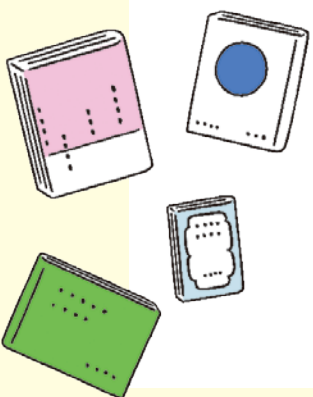
教科書教材とともに使う別の教材（副教材）を用意することで、学習をより豊かなものにすることができ、どのような副教材がよいかは、その目的によって異なります。

① 教科書教材での学習をいかして、読むことができる作品・文章

これは、学んだことをいかす場として活用することができます。教科書教材での学習が終わった後、その力を使って、用意した副教材に取り組んでみることで、言葉の力が確かなものとなります。

② 教科書教材と同じ話題について書かれているが、立場や考えなどが異なる文章

これは、考えの形成を豊かにするのに役立ちます。教科書教材と並行して読むことで、多面的に物事を考えることができ、中学校で求められる、批判的に読む力にもつながります。



教材研究や授業づくりへの疑問を、茅野政徳先生（山梨大学）にうかがいました。

Q.1 教材研究をする時間が取れません。

先生方は忙しく、また複数の教科・領域を担当することが多いので、一つの教科の教材研究に力を注ぐのは難しいですね。読んだ印象や印象に残った言葉を学年の先生で共有したり、先輩からその教材のポイントを教えてもらったりすることも大切な教材研究です。教材研究は、料理のようなものです。最初は手際が悪いものですが、慣れてくると速くなります。短時間で料理を作るには、コツがあるでしょう。教材研究も同じです。

例えば、低学年の「読むこと」の指導事項に「一場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。」があります。この資質・能力を育みたいと、「スイミー」の教材研究をしますとします。さて、スイミーはどんな行動をとっているでしょうか。また、どんな場面の様子でしょうか。「広い海」「くらい海のそこ」など場面の様子が分かる表現、「さげんだ」「教えた」などの行動が見つかります。育みたい資質・能力に的を絞って教材研究をする。このコツがつかめると、短時間でおいしい教材研究ができますよ。

Q.2 ささまざまな例を見ながら教材研究をすると、その授業と同じになってしまいます。

そもそも同じになってもよいのです。「過去」の教材研究は「今」の土台となります。しかし、何か物足りないし、手ごたえがない。そんなときに考えたいのが「教材分析」と「教材研究」の違いです。教材分析は、教材を単語や文節、文という小さな単位に区切って行うもの。多くの気づきが生まれますが、その気づきを全て学習の舞台にのせるわけにはいきません。その中で、目の前の子どもに育みたい資質・能力を基に何を取り上げるかを吟味するのが教材研究です。育まれてきた資質・能力、新たに育

みたい資質・能力。それが分かるのは、目の前の子どもを知る先生だけです。目の前の子どものための「教材研究」を基にした授業であれば、同じであっても違ってよいのです。全ては子どものための「教材研究」ですから。

Q.3 教材研究で想定したとおりに授業が進まないときは、どうすればよいですか。

授業では、子どもから教材研究を超えた解釈や想像が生まれることがしばしばあり、想定どおりに進まないのは当然です。それはよいことです。教師の教材研究を乗り越えた解釈や想像を大いに楽しみ、褒めてあげてください。

教材研究で導けるものに、理解、解釈、想像があります。それらの違いを、「ちいちゃんのかげおくり」を例にして見てみましょう。「その夜、ちいちゃんは、ざつのうの中に入れてあるほしいいを、少し食べました。そして、こわれかかった暗いぼうくうごうの中で、ねむりました。」「ちいちゃんは、ざつのうの中のほしいいを、また少しかじりました。そして、こわれかかったぼうくうごうの中でねむりました。」という叙述があります。登場人物はちいちゃん、場所は暗いぼうくうごう。これは答えが単一の「理解」です。ちいちゃんは、ほしいいを「少し食べた」のが「少しかじった」に変わります。ほしいいの残りが少ないのか、食べる元気がなくなったのか、家族のために残してあげているのか。ある一定の範囲内でさまざまな答えが存在する段階が「解釈」です。ちいちゃんを抱いて走ってくれたおじさん、はす向かいのうちのお婆さんがその後どうなったのか。文章中には書かれていないことに思いを巡らすのを「想像」とします。ほら、解釈や想像には一つの正解などないでしょう。だから大いに楽しめばよい。それが国語です。

